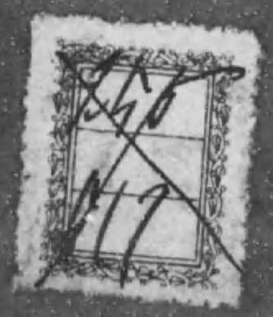
真言出要諦

特115
281



始

特115
281

當相即道即事
而真性相宛然

如意乙卯春瑞

大正
10 6 30
内交

はしがき

自分は曾て。靈肉の統一を圖り、それが徹底したならば、吾々の生命は、永遠無窮なるもの、この複雜な世に處して、簡易生活を實行するものは、皆悉く、自由と快樂を得られると。斯ういふ宣言の下に、靈肉統一簡易生活と題する、小冊子をば世に公けにし、それを實踐躬行し、來つたものである。

ところが此節、わが國の民心、大戰の餘波を受け、餘程動搖しはじめた、否動搖しはじめたと言ふよりは、正しく混亂したと言ふのが適當な言葉かも知れぬ、兎に角騷がしくなつて來た、言ふまでもなく、一時の混亂は、やがて思想界の、進化發展を意味するもので、自分の理想が、慥かに實現すべき、前提であると想はれると俱に、

自分は當相卽道現實主義の、曼荼羅宗僧侶で、その職責上わが敎理をば、活かして用ゆべき時節が、最早到來したものとの、深き自信を以て、此小冊子をば、世に公けにする譯で、ゆき届かぬところは世の識者に、補ふてもらひ、正してもらふ迄である』

大正十年高祖大師正御影供の當日に宇宙の絕對太靈と
吾人の淨菩提心とを適切に標幟せる如意寶珠
尊前に於て

桑原眞瑞

これをものす

如意山人

目次

總說……一
別說
其一　宗教と宗派……三
其二　世間と出世間……六
其三　迷ひと悟り……八
其四　罪と償ひ……一一
其五　自力と他力……一四
其六　變化と不變……一七
其七　理想と實際……二〇
其八　個人と宇宙……二四
其九　儀式と觀念……二六
其十　効果と弊害……二八
結尾……三二

眞言の要諦

桑原眞瑞述

總說

眞言密敎とは果して如何なるものなるか、こは實に難問題で、假令百千萬年の時間を與へらるゝも、筆舌を以て到底盡すこと能はずとは、いはゆる逃げ言葉で、其內容は、如何なる難事件も如何なる難問題も、皆悉く言語および文筆に依り、必ず解決を着ける、これが卽ち眞言密敎曼荼羅宗の特色である。

世の多くの人が、難問題とし、重大問題とし來れる、眞言密敎の要諦をば、一言一句にて、これを盡せば、卽事而眞性相宛然といふこ

とになる、卽事とは世事に卽當してといふこと、而眞とは而も超然たる眞理といふこと、性相とは、性は形にあらはれざるもの、相は形にあらはれたるもの、宛然とは只そのまゝといふこと。

これに連絡をつけて言へば、世の無常迅速生死流轉のありさま、それが取りも直さず常恒不變で、不生不死の實性で、此世のありさまが、そのまゝ金胎兩部合併の曼荼羅である、曼荼羅とは梵語で、これを翻譯すれば、輪圓具足といふことになる、卽ち欲減なく何もかも完備してをるといふ意味になる、

尙すこし詳しくいへば、心靈と肉體は分離せず、時々刻々同一同味に、進化發展しつゝ而も、生滅せず變化せざる或る物に伴なはれてをる、吾々の肉體と精神とが一團となり、同時に活動を離れ、否活動が他方面へ移り、土となり灰となりて大變化を來した場合も、必

ず或る物に伴なはれてをる、天落ち地崩るゝも或る物は牢乎として變化なく存在してをる、則ちこの名もなき或る物を本尊として、世に宗敎といふものが顯はれたのである。

かくの如く宇宙の眞相をば適切に、只ありのまゝに說明する、それが卽ち眞言の眞言たる所以で、方便假說を用ひず、一宗一派に偏せず、事理に執着せず、凡身のほかに佛身を見ず、娑婆世界のほかに極樂淨土を見ず、生存競爭の渦中に安んじて進化發展を歡び、奮鬪努力に甘んじて希望の生涯を開き、言行一致知行一致して曼荼羅を實現する、これが卽ち眞言敎徒の目的で、眞言秘密曼荼羅宗の要諦實に、これにほかならずである』

眞言密教は、言ふ迄もなく宗教中の一宗派である、けれども其説くところは、宗教全體の精要を秡き、宗派に拘泥せず世相に執着せず天眞爛熳たる宇宙の眞相をば、短力直入たゞ有りの儘、求法の者へこれを示すにほかならず。

されば眞言密教とは、宇宙の眞實義を直言するが故に眞言といひ、釋尊所説の、經文の裏面に潜みつゝある、所謂釋尊の心中秘密を教ゆるが故に、密教と名づけたもので、求法の人にして機根さへあらば、遠慮なく無造作に、赤裸々に説き示すべく、實に開放的の宗旨である。

特に眞言の要諦を體得したる者より見れば、あらゆる人間、あらゆる禽獸、あらゆる蟲魚、あらゆる草木に至るまで、皆悉く既に立派に成佛してをる、只世の多くのものが、われ既に成佛せりと知らざ

るのみ、卽ち知らざるものへ對して、緣に隨ひ機に應じ、只世の中の有りの儘をば、教へ示せばそれでよし。

それに就ひて、弘法大師の師匠たる、唐の惠果阿闍梨が、實に皮肉なことを言はれた、何と言はれたか、卽ち、成佛のむつかしきにあらず、覺りの得がたきにあらず、一切衆生既に成佛せりと説き、迷妄の當體卽ち正覺なりと示す眞實のをしへ、その教へに遇ふことの容易ならざる譯であると、斯ういふことを赤裸々に言はれた、これは充分玩味すべき、恐らくは空前絕後の金言であらうと思はれる。

之を要するに眞言密教なるものは、表面一の宗派でありながら、裏面には宗派教派を超越して、所謂宗派心といふ偏見がない、畢竟他宗他派といふは名目のみ、その實質は眞言密教の部分的變身と見て最も敬意を拂ひ、宗派的色眼鏡を使用する事は、最も大なる罪惡と

心得ねばならぬ、これが卽ち秘密曼荼羅宗の特色である』

別說其二　世間と出世間

世間とは說明する迄もなく、生存競爭の世の中のことで、多くのものは、なるべく美味美服を望み、なるべく大厦高樓に住まはんとしなるべく人臣の榮を極めむとし、なるべく勞薄ふして効多きを貪りなるべく自己のみの安全を圖りて、他を顧みざるものゝ如き、これが卽ち、普通一般のやりかたになつてをる。

斯かる世俗のありさまをば、非常にうるさく思ひ、世を遁れて山奥で仙人になるもの、人里はなれて草庵に籠り出家するもの、これ等が卽ち出世間の手はじめで、所謂世間を超越した境涯である、けれどもこれは眞の出世間ではなく、言はゞ生存競爭の落伍者で、止むを得ずの出世間である。

世に執着するもの、世に容れられざるもの、これ等兩者を氣の毒に思ひ、これ等を救ひ助けむとする、仁人義士が、思想の反動を受けて、自然世に現はれねばならぬ段取りになる、なるほど仁人義士に相違ない、けれども人といひ士といふ名前では、あまり有り難ひ感じをば起す者がない、そこで神の使者とか、佛の再來とか、種々超人格のものとなり、超世間の敎法を設け、天國とか極樂とか、種々の理想世界を造り、人をして世に安んぜしむる道をば開ひたものでこれが卽ち出世間といふのである。

因より世間を離れて出世間のあるべき筈なく、現世を離れて天國や淨土のあるべき筈はない、卽事而眞とは卽ちこゝの道理をば、最も適切に、最も痛切に、言ひ顯はしたもので、生存競爭の俗諦に安住

して、而も超然たる眞諦を體得すべく、此娑婆世界をば其儘に、天國たらしめ極樂たらしむべきである、極言せば、生存競爭の當相が取りも直さず佛作佛行で、娑婆の現狀が取りも直さず極樂淨土である。

尙一歩進んで、天帝または法佛といふ言葉も、天國または極樂といふ言葉も、更に其必要を認めざる程度に迄、了解徹底して貰ひたひのである』

別說 其三 迷ひと悟り

迷へば凡夫といふ名前がつき、悟れば佛陀といふ名前がつく、これと反對に、佛陀も迷へば凡夫となり、凡夫も悟れば佛陀となる、恰度、悲觀主義の者の眼には、此世が地獄に見へ、樂觀主義の者の眼

には、此世が極樂に見へると同樣で、地獄も極樂も、共に此世が本體である如く、迷ひも悟りも、共に人間が本尊である。

さて悟りといふものは、非常にむつかしひものゝよう、想ふ人もある、否多くの人が、殆どむつかしひものと、想ふてゐるらしひ、それがそも〳〵の間違ひで、いはゆる迷ひの根本である。

元來悟りといふことは、物の間違ひに對する反語で、物を誤つて見たり、謬つて考へたりする、その間違ひに對する反對の言葉で、白き物を白きと見、善き事を善しと思ひ、惡き事を惡しと思へば、それでよし、知れぬを知れずとし、知れば知れりとする、それが卽ち佛知見である、然るを物々しく、悟道とか修養とか練心とか、何とか彼とか七むつかしくいふ、そのむつかしい前口上が、却つて要領を失ふ事となり來つたのである。

煩惱卽菩提といふ言葉があつて、煩惱をば其儘煩惱と知れば、それが卽ち菩提の光りで、煩惱のほかに菩提はない、煩惱を斷滅せむとすれば、ます〳〵煩惱の募るもの、妄念が妄念を拂はむとするは、血で血を洗ふが如く、百年河清を待つに似たりである。

佛敎には、五戒十善乃至二百五十戒とて、種々むつかしひ戒法がある、けれども菩提心戒體とて、事理の見解を謬らず、眞面目に奮鬪努力する、それを以て戒めの基礎としてある、一例を擧ぐれば、僧侶の妻帶問題の如き、戒體の上より言はゞ、却つて奬勵すべきで、弘法大師の如き濶達の祖師が、今の世に存在せられたならば、必ず末徒に妻帶を勸め、それを基礎として、大ひに寺院生活の改造を圖られるに相違ない。

畢竟戒律といふ前口上に捕らはれ、因襲の久しき、それが却つて煩惱となり執着となつて、戒律の根底をば、破壞し去つたのである、多くの僧侶は俗人に媚び、俗人はこれに迷はされ、形骸を留むる虛飾的僧侶をば、尊むでありがたがるありさまは、實に迷ひの程も底なしと言はねばならぬ、因より迷悟は一體なり、從來の迷ひをば、迷ひと知ればそれでよし』

別說 其四 罪と償ひ

若し夫れ妻帶なるものが、佛敎僧侶の罪とならば、佛敎中の眞宗僧侶も、基督敎の僧侶も、共に罪となるべき筈である、けれども前章に述べたる如く、戒體に抵觸せざるのみならず、生存競爭の落伍者のほか、之を禁ずるが如きは、實に無意味である、宗敎の上より見て斯くの如しとすれば、これを普通道德の上よりするも、倫理の上

よりするも、罪とはならずして、人生に欲ぐべからざる、一大要素なることは、最早説明を要するまでもなく、わかりきつた話のよう思はれるのである。

更に問題とすべきは、肉食の一件であるが、肉食なるものは、魚鳥獣肉いづれにもせよ、之を喰ふといふことは、直接もしくは間接に殺生罪を犯してをる事になる、然るに天の神が人間のために、食物として之を造られたもので、所謂天のたまものであると、こういふ傳説を、まことしやかに説くものがある、これは肉食の罪をば、罪と知りつゝ其罪を、誤魔化し去らむとする、くるしまぎれの辯明で人間なかまのため、我田引水もまた甚しと言ふべきである。

かゝる採るに足らざる傳説はさて措き、眞面目に考へて見れば、佛敎徒も基督敎徒も、乃至無宗敎徒も、肉食すれば、無論罪を犯したに相違ない、加ふるに其罪を、誤魔化し去らむとするが如きは、卑劣極まる心底といふべく、罪ますゝ深しといふべきである。

されども因襲の久しき、罪をば罪と知らず、氣咎めする者さへ無きに到つた、洵に悲しむべき事と言はねばならぬ、果して罪なりと知り得るや否やであるが、若し之を罪なりと知る者あらば、宜しく悔ひ改むべしである、悔ひ改めて、再び肉食せずばそれでよし、相變らず世の習慣に任せ、肉食を繼續せむとする者は、必ず其罪をば、償ふ覺悟がなければならぬ、如何にして其罪を償ひ、如何にして已が良心の滿足を買ひ得るか、則ち肉食の爲に得たる精力を活用し、世のため人のため已れのために、進化發展を圖り、奮鬪努力すればそれにてよし、それにて立派な償ひとなり、殺されたる魚畜禽獸も皆悉く、快く成佛することゝ想はれる、否先づ肉食者そのものが、

現身成佛する譯である。

則ちかくの如き規轍を應用して、道德上犯せる罪、法律上犯せる罪その他あらゆる各種の犯罪は、假令一分間たりとも猶豫なく、即時即刻、償罪をば勵行し、宿業とならざるよう、原因即結果の眞理を實現すべく、相互の努力が肝要である』

別說其五　自力と他力

天帝および佛陀にすがりて、未來往生をねがひ、または佛陀の本願を信じ、偏へに本願力にすがりて、其恩德を感謝する、これらが即ち他力門で、すべて神佛にすがらず、その誓願にすがらず、みづから佛知見を開くもの、ならびに神人の區別を無視し、神人一體の理を實現するもの、これが即ち自力門である。

かくの如く自力と他力の二方面あるが如きも、法の本源は一味平等で、自力を離れて他力なく、他力を離れて自力はない、天帝にすがり佛陀にすがる、すがるといふ心が既に自力であつて、自力でなくば信ずることも、感謝することも出來ぬ筈、これと反對に、神佛にすがらず、神人の區別を見ずといふ、其すがらずといふ言葉の意味が、或る物にすがり、區別を見ずといふ言葉のもとに、既に或る區別を見てをる、つまりこれ一法の兩義にほかならずである。

尙自力は難行で、他力は易行であるといふ說もある、けれどもこれも大きな間違ひで、直覺神經のするどひ者にむかつて、造物主や他力本願を說く、說かれたものは迷惑で、却つて難行と言はねばならぬ、何となれば、神明といひ佛陀といひ、天帝といひ太靈といふ、其名稱異なれども、其實體は同一で、不生不滅の或る物で、絕對的

のものである、信ずる者を愛し、信せざる者を愛せずといふような相對的のものでない、いくらすがり附くも、駄目と見ねばならぬ、元來所歸の本尊へ對して、天帝とか如來とか、何とか彼とか、超然的人格をば、與へ來つたのがそも〳〵の間違ひで、これがため多くのものが、みな迷ふようになつた、そこで不生不滅の或る物として措けば、何等差し障りがない。

則ち不生不滅の或る物と、無常生滅の現象とは、形に添ふ影の如く波に從ふ水の如く、相對的吾々肉身の當體が、卽ち絕對的或る物の一部分で、實際心丈夫な感じがする、こうなると造物主や、他力本願の名に迷ふ必要もなく、却つて、易行の中の易行と、いはねばならぬ事になる。

斯く安心決定した上にて、世の習慣に隨ひ、いはゆる他力の門徒と

共に、名號なり題目なり眞言なり神咒なりを唱へ、簡易なる方法に依り、假りの本尊を通じて、絕對的或る物を觀見し、すがらずしてすがるが如く、他力ならざる他力に隨ふ、これが卽ち社會救濟の一法策も心得ねばならぬ。

かへす〴〵も宗派に拘泥せず、自力他力の名に執着せず、人にたよらず法にたよらず、只面々の本心本性を、たよりにすればそれでよし、それが卽ち徹底的安心立命の、要領といふものである』

別說其六　變化と不變

物質無常精神無我といへることは、一面の眞理であると共に、物質不變精神不滅といへることも、亦一面の眞理といはねばならぬ、否物質と精神は、一體の上の二用と見て、而も生滅とか不生滅とかい

ふ理窟を離れ、その實相及び實性をば、只ありの儘に觀察する、それが卽ち佛知見で、神佛を知らず、天國淨土を知らず、眞面目なところに甘露微妙の味ひがある。

川の水は、時々刻々、流れ來り流れ去つて、寸時も止まらず、百年以前も百年以後の今日も、流轉生滅しつゝ、其規轍をあやまらず、卽ち變化しつゝ而も變化せざる、或る物がなければならぬ、山の松は、時々刻々、進陳代謝して、暫くも止まず、千年以前も千年以後の今日も、榮枯生滅しつゝ、其實相をあやまらず、卽ち變化しつゝ而も變化せざる、或る物がなければならぬ、生れては死し、死して生れ、部分生滅具體生滅と、生死に往來しつゝ、而も人間なれば人間の實相をあやまらざる、こゝに充分注意を拂はねばならぬ。

春は花さき秋は實のり、夏は茂り冬は枯れ、天地陰陽、强柔男女、

有情と非情、分離と和合、兎にも角にも世の中は複雜なもの、この複雜な中にも、單純な條理がある、これに着目して要領を得ることに、充分注意せねばならぬ、哲學の書物、耶蘇の聖書、佛敎の經文皆悉く、この要領を掴まむための筋書である。

さて其筋書なるものが甚だ複雜で、諺にもある通り、悉く書を信ずれば、書なきに如かずといふ言葉をば、借らねばならぬことゝなつた、尤も各宗各派に、僧侶なり敎師があつて、それ〳〵巧みに說明はしてをる、けれどもそれが殆ど我田引水の僻說で、僧侶そのもの敎師そのものゝ、勝手な說になつてをる、そこで彼の筋書に對する第二の筋書が、必要になつて來た。

宗敎の內容かくの如しとすれば、聖書や經文にすがるよりは、寧ろ活動しつゝある宇宙の實相に就き、その要領をば自分勝手に捕へる

に如かずである、否宇宙の活動狀態が、その儘活きた經文といふのほかなく、千變萬化生死無常の當相、さながら輪圓具足曼荼羅の活動で、吾々の生命は、卽ち永遠無窮なる此曼荼羅である』

別說其七　理想と實際

山岳崩れ樹木枯れ、禽獸斃れ蟲魚死す、これを見て悲哀の情をば、催すもあり催さぬもあり、假りに催すものありとも、われ〳〵人間なかまの死に對する如き同情はない、おなじ人間なかまでも、親と兄弟とか、妻とか子とかいふ、肉身關係のものゝ、死んだ場合の如きは、恰も自分の身を削らるゝ如き、苦痛を感ずるもの、これが卽ち自然の人情である。

親兄弟妻子に對する愛別離苦、かくの如しとすれば、最も痛切に已れ自身の、死に對する覺悟如何と、いはねばならぬ順序となつて來た、如何に元氣盛むなるものも、一たび死といふ問題に觸れては、悲觀の程度も、實に絕望的と言はねばならぬ。

宗敎を無用視し、神佛を無視し來りし者も、一たび死の問題に逢着せば、妄想の神でも、空想の佛でも、本尊の如何に拘らず、何かにすがらねばならぬ、所謂溺れるものは、藁屑でも掴むといふは、全く斯ういふ場合である。

因より死は悲むべきもの厭ふべきもの、なれども、もと〳〵此世へ生れて來たのが無調法で、どうで一度は、生れざる以前に、立ち還らねばならぬ、それも、我儘勝手に、生れて來た譯ではなく、生れねばならぬ因緣に、あやつられて、かくの如く生れて活きてをる。

昔から、人生五十といふ事がある、恰度五十歲になつたから、一つ

こゝらで死んでやらうと、思ふても見たが、妻子の恩愛に惹かされたり、朋友に叱られたりして、どうにも死ぬ事が出來ぬ、池へはまれば引き摺り揚げられ、腹を切らうとすれば、刄物をもぎ取られ、因縁熟せざる間は、どうにも死ぬこと出來ぬもの。

因縁熟し、死なねばならぬ時節が到來したならば、居睡りしてをる間にも絶命する、肉身の者は嘆き悲むが、死ぬる本人は割り合ひ無造作なもの、人間が死ぬのも、矢張り宇宙活動の一分子で、秘密莊嚴曼荼羅の、微妙のはたらきであつて、個人でどうすることも出來ぬ、絶命すべき時節に、絶命する迄である。

人間が樹木の枯るゝを見て、虚心平氣なるが如く、樹木も亦人間の死ぬるを見て、虚心平氣でをるらしい、而も春の季節が來れば必ず茅を出し、冬の季節が來れば必ず冬枯がする、所謂進むべきには進む、退くべきには退く、人間は兎角我儘で、豪ひものとか賢ひものとか言はれたさの名のためか、金儲けといふ利のためか、即ち名利の爲に進むのが關の山で、隨つて退かねばならぬ時、死なねばならぬ場合にも、勝手氣儘に駄々をこねる、若しも小説的に、宇宙の主宰者があるものとすれば、度し難きは人間なるかなと、大ひにこぼすことゝ想はれる。

萬物の靈長とは人間なかまの自稱で、人間以外のものが、之を許すか許さぬかは疑問である、人間は鯉の如く從容として死に就くの覺悟ありや否やと、一例を擧げて見れば、萬物の靈長はいよ〳〵疑問である、なるほど人間の理想はなか〳〵高ひ、けれども實際に就ひての手並は、高き理想に伴なふや否や、大ひに反省せねばならぬ、そこで人間には、是非共眞面目な宗教が必要で、これに依りて先づ

偏執を離れ、そして眞面目に立ち還るのが肝要である」

別說其八　個人と宇宙

宇宙を大海に譬ふれば、萬物の實性は海水の如く、萬物の現象は波浪の如く、われ〳〵個人は、恰も大海中の一波、もしくは一浪たるに過ぎず、洵に心細ひ感じがする、けれども亦安心なところがある卽ち、水を離れて波なく、波を離れて水なき如く、心細くたよりなき一波一浪も、矢張り宇宙の一部分で、波浪の當相さながら、一大海水の全體である、それゆへ實際心丈夫な譯である。

わづか五尺の形骸で、壽命もわづか五十年、實に大海中の、一波一浪たるに過ぎざる吾々人間も、萬代不易不生不滅の、或る物の一分で、其本體は增減なき、宇宙大のものと、思はねばならぬ、果して

斯く思ひ、斯く信じて、安堵し得るや否やが、事實問題で、所謂理窟を離れたところである。

則ち理窟を離れ、事實に就き人情の上より、安心して世に處する途をば、常識を以て考へて見ねばならぬ、如何にすれば吾々の胸のおさまりが着くか、こゝに洵に簡便な方法がある、それは卽ちわが前身たる、祖先を崇拜することで、則ち祖先を活かさむとするも殺さむとするも、要するに當代の吾々の自由で、これを殺せばわが前身の亡びとなり、これを活かせばわが前身の榮へとなつて、當代の其身が取りも直さず數代、若しくは數十代、否天地開闢以來連綿として、生き延びてをる事になる、この規轍をば、子々孫々に繼續させる事とせば、百千萬歲、否天壤無窮の眞生命を、保ち得らるゝ事となるのである。

かくの如く、祖先を活かし、子孫を活かし、六親眷屬を活かし、一切衆生を活かし、個人と宇宙を打つて一團となし、無我の大我に安住して、以て意義ある生涯をば、努めて開拓すべきである』

別說　其九　儀式と觀念

儀式といふものも隨分必要なもの、これに依りて、人情及び風俗を維持してをる、いくら悟り過ぎた無頓着な人間でも、肉身の者の死骸をば、裸體の儘、野に棄てる事は得せぬもの、讀經引導何等の功なし、況んや耶蘇のおいのりをや、神道のお秡ひをやと、皮肉は言へるものゝ、さて浮れ節語りを雇ふて、導師にも得せぬもの。

淨土宗の本尊に、大日如來も似つかず、眞言宗の本尊に、十字架もへんなもの、神職が數珠つまぐる譯にもゆかず、僧侶が玉串さゝぐ

る譯にもゆかず、矢張り其宗派其教派の法式に依り、なるべく習慣を重んじ、老幼婦女子にも異議なきよう、而も祭詞の目的に背かずして、崇敬の念を起さしめる事に、心せねばならぬ。

さればとて、只徒らに儀式に拘泥して、無駄に時間を費したり、些細な事を爭ひ募つたりするが如きは、最も慎まねばならぬ、儀式のことゆへ、なるべく質素に、なるべく簡易に、只誠意を以て、祖先の靈を崇拜すれば、それにて目的は、達し得られる譯である。

特に心得置くべきは。彌陀を信ずるもの、大日の尊像を拜せずとか基督を信ずるもの、弘法大師を禮せずとか、そういふ心狹ひやりかたである。そういふ心得では、無宗教家に對しても、洵に恥づべきことゝ思はれる、則ち儀式は儀式として、所謂鄕に入りて鄕に隨ひ家に入りて家に從ひ、目標の種類如何に拘はらず、心に所歸の本尊

を念じさへすれば、何の仔細もなき筈である、六字の名號を唱へて十字架に向ふも、題目を唱へて彌陀佛に向ふも、其要領は己が觀念にあることにて、それにて自心も滿足し、他人にも滿足を與へる、これが卽ち宗敎徒相互の心得であつて、而もまた、世道人心を收容するの秘決といふべきである』

別說其十　効果と弊害

火や水は、世に必要欲ぐべからざるもの、なれども能く物を燒き亦能く人を溺らせる、人間にしても其通り、善に强き者は惡にも强い兎角世間の事は、効果あるところに、必ず弊害の伴ふもの。宗敎は世に必要欲ぐべからざるもの、なれども其弊害もまた實に甚しい、卽ち、宗敎の爲に家庭の團欒を欲ぎ、宗敎の爲に親族と不和を生じ、甚しきに至つては、國と國との大戰爭を、惹き起すこともある、否戰爭は殆ど宗敎戰爭であると言ふも、可なりである。迷信の結果は恐るべきもので、例せば、病人に醫藥を與へず、加持祈禱をのみことゝし、治癒すべきをも見殺しにするが如き、神の告げなりとて、祖先傳來の家財を擧げて、之を悉く敎會へ寄附し、家族等を路頭に立たしむるが如き、政府へ納むべき課稅を惜み、怠納處分を受けてまでも、寄附金を御本山へ納むるが如き、天の神はまことの親で、現在の親は假りの親であると妄信し、知らず識らず肉親を粗末に扱ふ者あるが如き、まことの神は天帝で、日本の氏神の如きは眞の神にあらずとて、敬神の美風を破壞し去るが如き、まことの國王は天帝で、現在の國王は假りの國王であると信じさせ、日本の如き國體をば、根底より覆へさむとした、或る時代もあつたの

である、宗教の弊害も、實に底知れずと言はねばならぬ。宗教の内容かくの如しとすれば、害多くして益すくなく、寧ろ宗教無きに如かずといふ、批判を下す者ありとするも、更に辯明するの途がない、そこで各宗各派の、僧侶および教徒は、互ひに相誡め互ひに相慎み、宗教たるの體面を穢さず、本來の目的に背かず、本來の方針を誤らざるようせねばならぬ、別して信徒は、僧侶および教師の誘惑にかゝらざるよう、僧侶および教師は、信徒にかつがれざるよう、互ひに注意怠るべからずである。

宗教の勢力は、政府も之を如何ともする能はざるもので、在來の弊害を、根本より取締ることが出來ぬ、加ふるに似非教の如きも、之を認めねばならぬ事となつた、やがて第二の似非教も、之を認めねばならぬ事と、なるかも知れぬ、則ち認められざる以前は兎も角、

一旦認められた上は、せめておとなしく、眞面目なやりかたに、改良して貰ひたいものである。

慈善事業は慈善事業として獨立すべく、教育事業は教育事業として獨立すべし、これ等はみな、宗派宣傳の機關にあらざるが如く、宗教は宗教として、獨立獨歩し、政府にすがらず富豪にすがらず、眞心を以て慈善をなし、人間の義務として人を教育する、それでこそ眞面目な宗教家といふべきで、これに野心を交へてはならぬ、信教は自由である、人間の意志を束縛してはならぬ、否束縛の出來るものではない、けれども無邪氣なる兒童、及び無經驗なる青年、これら思想の單純なる者へ、熱烈なる宗派心を感染させては、前途の弊害實に想ひ遣らるゝのである。

然るに今日の宗教家の多くは、政府にすがらむとし、富豪に媚び諂

ひ、信徒より救濟され、識者より精神教育されてをる、わが國のみならず萬國を通じて、宗教家なるものが、種々の弊害に陷り、まさに宗教の命脈を失はむとしてをる、そこで先づ寺院生活の改造、布教方法の根本改良、儀式の改善等、今日は實に宗教の一大革命を要する、最も大切なる時機であらうと思はれる』

結尾

わが國は、幸福にも、萬世一系の陛下を戴き、世界の列强と肩を比べ、文化の程度も次第に進み、國民の思想も餘程進むで來た、近頃思想の混亂を憂ふるものあるも、其內容は決して憂ふべきでなく、寧ろ樂觀して可なりで、明治初年民心の動搖が、却つて今日の國勢を造つたようなもの、此頃世界戰爭の餘波を受け、思想が急激に變化した、これが卽ち思想の向上する前提で、一時の混亂は長期の安定を意味するものである。

思想問題の中には、知らず識らず先づ第一着に、宗教に對する考へが含まれてをる、國民思想が具體的に向上發達してゆかば、すべて手つ取り早く、現實主義を採るようになり、宗教の感化方もまた、從來の如き遣りかたでは、無論駄目になつて來た。

血のめぐりのわるい、時代おくれの人間ならば兎も角、神經過敏なる、現代的人物の爲には、理想の世界を天國に求め、或ひは西方に求めるような頓馬は無い、萬物を製造したといふ天帝や、蓮花臺上に、金色光明を放つ如來をば、夢想するような痴漢は無い。

けれども更に進んで、相對的生死輪廻、變化無常の當體、さながら絕對的不生不死、不變常恒と徹底して、これを直覺する迄には、進

んでをらぬよう想はれる、只絶對的の或る物をば、おぼろげに想像する迄に、どうやら進んでをるらしい。

そこで法佛法身、敎祖宗祖、氏神祖先等の木像畫像、銅像靈牌其他何にても目標を設け、それを通じて、相對的個人〳〵の觀念に依り、絶對的宇宙の本體と、一致冥合するよう、儀式と觀念と相依り相竢つて、常に練習を怠らず、而も之を活世間へ應用せねばならぬ、卽ちその應用が、最も肝腎である。

手に適宜の業を取り、口に適切の言葉を吐き、意に適當の事を思ふこれが卽ち秘密修行の應用で、われ〳〵個人の身體、および言語、ならびに精神、この三つの活動が、直ちに宇宙全體の活動となり、われは凡夫であるとも、ほとけであるとも、何とも思はず、一塵にも一法にも、更に執着せざる、それが卽ち絶對的宇宙大の成佛で、味噌屋は味噌屋の當體に成佛し、百性は百性の當體に成佛する、是れが卽ち現身成佛で、お鍋や三助に至るまで、言行一致、知行一致して、無我の努力に甘んじさへすれば、皆悉く、眞言秘密曼荼羅界會の聖衆で眞言の要諦實に、これにほかならずである』

眞言の要諦終

256
217

大正十年六月二十五日印刷
大正十年七月一日發行

非賣品

大阪市東區谷町九丁目二十五番地
著作兼發行者　桑原眞瑞

大阪市西區本田町通三丁目一三番地
印刷人　森田丈吉

大阪市西區本田町通三丁目四四番地
印刷所　大阪聚文舍

大阪市東區谷町九丁目二十五番地
發行所　藤次寺

終